



八犬傳九輯下帙下套之中拙評

上八

百六十七回ヨリ
百七十六回迄



持
門 4
番 600
卷 77



○近例の如く下唇をへは唇につけては湯を
そつると誤脱をあらうとよみうへへて
不文とらんとてんが茶拍子ハ有るを其拍子よ
よりて評外を意のそ入るの存外をあらうは
又かの不文唇をへてうち我がうへへ其意を
ゆりてはまはるは拍子をてんがうへへ
さうてはまはるは遠まがうへへは
ゆりてはまはるは遠まがうへへは
あつてはまはるは遠まがうへへは
あつてはまはるは遠まがうへへは

使いぬと書いさまで又まゐるきくゆいぬと例
たのびまふかくまぬ出推受ままをてい有ぬと
たるふいあつて田五箇條各々あふいぬと
よみえーんてい何々んぐとと鑿証を論といふ
やういぬといふはるるるるは鑿証にあつた
深威ししてたすのふくまゐるていといふ
ていにかゝるまゐるていといふは
と解まゐるていといふは
と解まゐるていといふは
はしるていといふは

ちんまゐる評あしあつたていといふは
お評たいたはあまのふくまゐるていといふは
しるていといふは
のふの又あつていといふは
とつていといふは
候とを除きまゐるた又かの筆拍子のまゐる者
まゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐる
まゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐる
まゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐる
まゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐる
まゐるまゐるまゐるまゐるまゐるまゐる

作者云事評の内申けん陸三
戦の兵制をいひてはも才
一の妙評也此
者の意裏小
折り其肺肝を
見ろか如くあ
いん是等ハ
見巧者中の
以ふて世の看
官の如くあは
あはれ其金庫
金の精評を
高至妙あは
まるといふ

百千万言の
おん成なるの評
あて水陸三戦
の所あて書れ
いとありあへん
くらむも感々

実なる古語小
見思狂は聖
とけ奉かいて示
るべし

ゆてえと一内くろ其後敗るるゆは博覧
の計策もその終あはれ二はと花とあり洲
生か前くと輯の末より仕起てせよてどく
と妙を各きよせて有ちるるよとて又別
さ外のるあぶくあはれ十もよとるま
ての上ちるは一はと燧破るの外てるまのい
そ一のの赤壁もはあえもそのめく火戦の
よ別よ何のさ外あは孔明江を流りて孫權を激
し周瑜會して掌中の合字より檀をさるる
まて皆赤壁一時火戦の仕起のめくこころとあ

あは輯定正諸侯を連つるの大兵をふる毛評
八百八人の計を呈さるるよとてあは輯五冊ハ大
よその仕起る不測奇の火戦よかるのめく
狂いそく東良の義死増松の奇勇黄蓋を轉
らぬその朝軍のさ外ふと赤壁のかのあはあは
よけいのぬあはさやかじハ後書の戦ハ本輯よ
こそあはとるるよとてあはぬとハ評をかきいふ
と終局かのさるる大戦戦の身目国府事よと
らぶらぶまきあはとてあは輯くのあはあはとて
あはあはとてあはとてあはとてあはとてあはとて

ちりぐも 並見こまは 深きゆゑに 寂庵が土坑信
乃が 報恩火猪の再出 大猪の神異 塚創の厚子
義音音が 勇敵大角が 成功二士の奇功 高森六が
子と助くる 異雲 定正が馬と 奪ふの 異房はどきる
外ハもちらん 其さう其妙あが といふんばいよく
あつく評しんぬいままさく 深くりとあかすも 於てな
ざるふれどそ 評中よりいぬぬは ぬめと下せく
よハ中さぶか かくてふぬが 又初とハたぐひて 其の輯
よりハ本輯が 二段まさりて おもひよありしう されど
其の輯も 種々深ぬさし 又こまや かげんおてくべ

又ふが 於下も こそごうらん 今うそハ 存よりふ
おととハ たぐひて 本輯のうま にかんくくやう
て 念お念きうと 園のよあけ ますほしうぬど
えや 行司とかくよ おもひまごり 二葉よまたのうま

春花秋月

○ 一 冬 雪の けしき 言とて 感服の よしと 存すつらごよ
何とくか ちとちと ちとちと ちとちと ちとちと
て 者ふれぬ なるし 例のめく 唇ぐま ころんごも 所附
言よいづれ 明諭 せしむる ありくも あらびと 感服て
やまごころ 乃が ぬるを 存すつらごよ 片ころんちと

たうろと君が... 中へ...
よけぬべし... 後序...
亦幹とを論ぜぬ... 本
中くは別は... 轉...
似而非書...
玉... 威...
中... 後序...
中... 後序...

しるる戯文... 中...
又評中... 中...
感... 中...
しるや... 中...

竹篠齋

辛丑十一月

著作堂老先生

玉お下

きハ叔き命大全の花のため又長尾の貫目のため
 辰相ハ勇臣なりと智臣ハ長尾の勇よと云ふるハ
 けづるべしと諫められどもやむこととほどお陣して
 たくして強敵ハ危うしと智臣の智臣しるところ
 今又諫めて降陣してその諫の首尾をせりて見ら
 此危然ハ叔き命が降陣大全が再出現サキ義通が英武景
 春が集ミ雄をぬくのたぬハ辰相ハ輕くもるる
 又後見老臣のこそ云ふとくると云ふと其のほど貫
 目とまことと云ふ深しと其の諫の前智ハいふまで
 云くことと諫めて降陣有るは如く老臣の用か

理言ハ老の貫目ハせと云ふと義通の降陣の工合
 二ぬゆるふ義通と云ふは終遠と云ふ何と云ふか
 くる花さくせと云ふまは著公の鬼神不測その
 花を咲せと云ふ又自は云ふとまづいふはちと
 むつと童大おの英武の花ハかの義家もその引ヒキ
 まで又事ハ人ぞあり為景義武と云ふ又曰く
 あまりは強勇と云ふと云ふはかつて人づよと云ふ
 十ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
 いまほひと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 を月ひて降陣してその人づよと云ふ何れの工合のよき

とらう又ぬこあしぎやその諫を引ひきつゝこの
諫よきさぐひとく只自給めやとあれどそれよは
勇も何り智も何り義受も何り温順も何りさぬ
たぬあぢとひなやうそわゆる一さほどに深めて
かしてゆるともなべきされどぬ筆をこそ只自
給よ其めのほまはちうそて何れもめ○信乃現ハ
の安危いふが博のよままびくぬのるの脱あるま
きハいふまぞをえど於精細感心くよ其内為景
が一槍は鳴呼りとあひひよ幸よして窮所とせら
まてありしちよと意外を賀とべし〜くふ

我ハ管領方忠良の者の死するもあれどそえ其死
るそいふく忠良大々ハもあふし蘇生して死する
まてて思おといえんや里見方よ死ハ書もあてどこ
さんと死もそいふあつど其死するハ降参の将衛村
翁の妙をいふ〜但しこれほどの大合戦双死傷
あづきり里見方し〜とて皆をすよ有べきとぞ
よハあ〜と〜と〜と結局ハ大士武勇の花の
大合戦それ和平大團圓するの奇戦結城法會
聞争の、大の令と〜と〜とまを此大合戦よ將
〜と〜と〜と首と〜と功とやど生捕を〜と〜と

評して好い実の
知音ありか

義成の仁令をあらせてきつと三折の大戦は大好か
いよまでもそそ名あき者にかのかくづつは死なえある
ともかく大々皆敵方てもなきうせらるゝあはれは
いつよく味方いよくそのとど切の双方死傷をく
てはあめ大戦とこところは死傷なきは昼とくる
ところ結局を糸の大奇戦二十年前どうもさび
かうとする腹稿あぶくきしめと奇と妙なり
書上といえおはう又別よゆめあることよと著作の
うも自戦よ一造化作者の意かくやんとおもふる
とよに成るふとあり又おもひの外はあつてくること

あつとがぶふふいよとまこところいふも作者のかつて
うもはまがまきいよひなるべし但しその長編を昼
もそのも成り自然のあひあふる今此大合戦よ
皆をそのその自由自在の本跡筆とこそあらぬと
たがめよう大急素はかくくと二十年未さうた
おろし一たり妙業とてあぶくきとあるその作者
のかつて自由とそくかの小造化の自戦のめくさつとこ
ちつけかそつけをきさるよと妙之巧之新奇之感を
と感せり妙業とよそのなごうようけつと
まあつと奥とつとまのちとつとつとつと

てそあらぬぞ筆のさきみよるそそいひらりおらひ
わらうらるる奥のつぎくよ又おのづからよりあま
あらんら○親善を危を追いけるよ為宗志んがり
してちつとささうぐん様子の草伏とくえんとかまへ
る為宗よ一貫目親善ありまざら危よりあんな親善
まやくまひんごうごうまあざらう青海はの飛ぶ
如きよあもをぞ近く追ひおよぶその二合まてし
おやろし一猪一知りてあれうらうらよあやまらしおやく
あまごの仔の霊玉の光を於たうらあもあまはひり
為宗親善と陰と合せて一上二下男女幸しるるん

細評
新

もあらん此難おを生捕ハお驛とちめめ分教とあ
かじめ知りてあもあまごう於親善が勇功とよおいて
いよくつるも一景春ハ破るく生捕べうばあど破り走し
しるのこよそハ後よ心服和平するあまじ愛子勇女幸の
為宗を此軍よか一景春を分身とてそと生捕ふ
わらぬうらうぐのぬいふよおあまらるるを於めし扇谷山内
と妙にどくしてさうくよあまあまあうらな○俱教二
あまおのぬとつぎまてささひるむる義通馬のつひは
追そんとさるのほとあまらるるまほひよてあま
るよ辰相のまうづまより二十あまらとひまあてたよ

末とある精細なるさげらふ戦場のけり其手
そのもてゆくあぶれが俱教二子^{たか}親をよびて巡^{めぐ}ら
ざるべしと久義通の先鋒^{さき}辰相義通を諫て
帰陣よおよび先鋒俱教二の一千をたて親居の山勢
をたすけよむ老臣のさうづがふのるべしかこよに只
義通といふあて陣のるのさあてこよ俱教二の
言せてそのさうづらとこよあられらまことよ精
細さげ感服又俱教二よよりついでに駒さび
さいまほひあつがこよは散どひ一千とつどあつて
かろあらしとつこも精あつとや寄舎五壇五が

云こも又こらうし何よりまてとさまさびけり○親を
侍が孝嗣等がさるうて廿三大将さへこよもよこの
戦場よあをよまこびつう問をんと馬よりあつら
こころへ俱教二等来るとゆえまづそのころのよよ
びる例のさるう文の段取さてしかやうし^{執事}
あこころのおもひ見お前陣より見てあれどゆめと
いま言をまづあつといふとあつだをく問ひもあつ
やうけくえりれど何がん今まてそのさあつし
ややくあつらこころ於あつはうかこみよそのあつ
んたが問ひあつらといふさきとあつらあつらつ

化作と此興を
幸意のあらむ

凡作あるは、その俱教二のさそとを平してくのみ多
昏くあるらそとをむごとく同くとて馬よりある
俱教二本思ひの同くをまづさしおきてこの
談右の如くは、右の如くとてくはせむとていへば、
くろそをきかぐさきより同くとゆひいさき
そのほどたのめて、萬のあぢむいん作ある
まことと感服するら俱教二をむく終つてん
もろん馬よりありるあぢむのたのよありて其
まづとてと孝嗣等は、面後と孝嗣等と同くと
くろ俱教二あるは、先をむくるとていへば、

ららの御評は
くろの御評は

と、そのおもひき其あぢむいんがや又俱教二を孝嗣等
の後説の後にもあつて、そのさけのりともいへば、
むらどりの遅きとて、言ふあるよとて、
ことおそとありあつて、
さるげありて、
このあひて、
を益くと皆くさんといふ、
くろとて、
くろあつて、
十人くろと何とて、

あつんよひのふらふらとていふにさうさうとつづつと
ぬくく ○ 親き情おもふなりあつて親子三人と書あめ
くへ走りやん例めぬうらなうぬうらなきせとらんて皮
と云ふ教しそげりしとぬうらなうぬうらぬいづれ
まもなげまぬとよひのみつぬいづあぢごとく親き情が
おごらのあぢやうつづつと書翁の筆やめつづ
よふとといふくつとてそよあふとふとつとていぬ
まづ孝親等のきるもつづつとゆくよなげまぬとよ
おもとるとたよくぬいづとふ一のはな文面のごきぢ
順あぶつづつとつとつとつとつとつとつとつとつと

書翁の筆とあつていふにさうさうとつづつと
よあつとていぬいづとつとつとつとつとつとつと
その簡よつとつとつとつとつとつとつとつとつと
よつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
親き情が話とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
らぬとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
およせぬとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
べー感とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
ハ元よりぬいづとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

多しぞ花あり再おぼえぬべしとハハれとくめてさう
 知んべくおのれもむさうよそのよめいとおんうのらん
 うとおむいさうらこころるるおつごうお輯めおたまづ
 こと外よそのの懸生ものごうらいつくもつて皆意外
 かのひそよおむいさうあるあるも一つもそ一人さう
 ごとおのれうそ外よそ外いふも奇くぬくさて
 よくおむいさうかくこそ孝嗣等格より川ようらふ
 とされさうぢれそのゆへうあつぞ水色ぢぢく五十
 三太等ハぬきこの者う知ち己きことよ其ころ此者
 等舟とううであらそのつぶうあつぞぢぢく今

好評

つよアそハかおええやくそくはうて動くくぬきかの
 外方流園上よりまろびおちこる信乃おハぐゆへうハ
 おむいほおまらぬべきもあつてさうらつづい
 遠く外のことやうくとさづうこころいさうしに武ぢぢ
 さてもくおそらうらり此條事こぬくと一つくあぢ
 いそんもらごぢれバたがかしこめて大奇大ぬもちん
 いさうらもそつけさく皆つづふ自れあつざるを
 孝嗣義通の危難をたきて再出現の大元そね
 ねきほよかちうつての妙おあまの感いお輯めの評よ
 ささよいついさうしやうよあぢえさう狂そのおまほよ

見巧者

かきつてのこゝ又洲寄ハハむらさぎで国府事へさる
しるなごさぶてこよつくりつやりの景春が軍を
えりきりよその危殆の傷は出たのつづぶのこあらば
其智の要目といよくおもひり孝副入房のさしき
とと右川は教養と不意は別とさうそと下とけり
めふきの別とさう移で其身次を大師がめさる
と告ぐつくなごりやぶていあぬてさぶそのつづぶ
つづぶと明白をえんやがつづぶつづぶつづぶつづぶ
改園大が犬田大川大板まここれま言をつづぶてあり
○五十三太素手吉おは館山を伐は早船の緊用とふ

この文外の務
洋作者の用
心とて思れ
より感服

そのおのむさびをさうやうなとあなて活人を生捕の用と
ふ一又そのおを親き法會といさぐの用をふ一そのむ
さびは大用とふといさうもあさびさくことと大用は奇
ぬもつづぶさうふ法會ありとつづぶとてかのたむ川
さぶとさうのぼりしまことと奇ぬこそのつづぶの自然
あこれ著翁のぬ筆のこあじかの小造化中の霊味と
伏姫のみちびきら或ハ狐龍老媪のたさくこととある
あぶ一やれどそと文外冥助奥は親き術がうよあるや
同忠は義丸をさとさくひる丸をたさく著翁のぬ
業そのさといさうも奇ぬこ五十三太結城の親き術と

見巧者

驚く色なきまで軍議おき所が發言よてハと
ころのやうにそくあぢてひひなく孝嗣も用もな
おき所ハいふことこふづくの諸人がくめんしるよ
孝嗣も又あつて驚くをさくさみて軍議をおきける
よて用ありき見あるハもらんけりあ入よておき所がさづき
奇策とてくまなむころのやうあぢてひひ驚く老棟
筆の好感いそんも今さうあぶーおき所頭をかひけり
一句好くその議ハもひひあぢてひひいあぢ
てひひあつてそのさうのさうもあひひいひひい
とさう埋伏していばあふの奇兵をまらんやへハ

景春の憤怒の兵勢そのさうことまてハやぶらうとくか
るをさくと言とくせさう信友のあひひいさうへとてハ有
べくびとハあへど右とくころのさうよいさうあぢてひひ
あふゆえよさういひひいあふこの景春其機とさう
うさひておき所退るさうとつさう走り喜助大寺
ハさうかくして敵の後陣をさうこれいざあふて其さ
へをかぬうつちねハ孝嗣がいふとさうと大同小異のやう
かハ奇兵とてそのハ奇兵あふさういひひいさうんさうハ孝嗣が
議とらきよあふと景春が憤兵をさうとハ必勝とらうが
らハ神傳の陣をもちてひひいあふその陣ハ入らるぬや

奇兵論にて吾まゝ大目小果の奇兵と云ふ一語と云
むひひが目と云う例のうらちもあつぬ一かく自解せ
ほどもあつぬもの疑ひ昏まもあつぬ一かく自解せ
を疑ふて一かく昏るかく一ひつねの首首あつぬ
あのが疑と云ふんと云ふらんあつぬ一かく自解せ
さぞあつぬ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
計のまゝと云ふ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
あつぬ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
あつぬ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
あつぬ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ

くちと一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
と云うかくのめまと云ふ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
○親善がしよと云ふ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
あつぬ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
いさうもその遺念あつぬ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
かけをなれて別はよむと云ふ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
まゝ王者の軍の論と云ふ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
さぞあつぬ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ一かく自解せ
の巻よ信乃ねハが顯定の太軍よと云ふ一かく自解せ一かく自解せ
こゝろ信乃ねハが言よ王者の軍あつぬ一かく自解せ一かく自解せ

かゝるおぼろげな言はら其論をよめ、同じ其
外も、大士よとあるの言共、のちあり、そのとこ
ろそのおぼろげな言はら、おぼろげな言はら、おぼろげな言はら、
くりそのよりの王者の軍、その意を、おぼろげな言はら、
大士の本色と、おぼろげな言はら、**○八陣の奇**
状と、そのと、景春の眼、おぼろげな言はら、
らん其陣、おぼろげな言はら、**奇**なるおぼろげな言はら、
て其奇の、おぼろげな言はら、**正大**、**奇**なるおぼろげな言はら、
正大の、おぼろげな言はら、**結城**の石塔と、同じく、**尖**状と、**唇**也
ざるゆゑ、其奇、おぼろげな言はら、**奇**なるおぼろげな言はら、**演義**、**三国**

志の諸島の八陣、其奇状をつらて、おぼろげな言はら、
妙筆も、唇也、おぼろげな言はら、**面**なるおぼろげな言はら、
や、おぼろげな言はら、**軍記**、おぼろげな言はら、**奇**陣と、
唇也、おぼろげな言はら、**本傳**、おぼろげな言はら、
おぼろげな言はら、作りおぼろげな言はら、**唇**也、
やおぼろげな言はら、おぼろげな言はら、**唇**也、
おぼろげな言はら、**前**の評、おぼろげな言はら、
おぼろげな言はら、**伏**妖の神、**冥**助、おぼろげな言はら、
漢国の仙童、術士の如き、おぼろげな言はら、
やうい唇也、おぼろげな言はら、おぼろげな言はら、**神傳**の

陣の奇くるものまきまていふやうにて本傳中の二奇苑
 は八層をふくむるれども其奇とてあまきまてハ層を
 ばら用心いふも深きまてやれおまのうはかけあらば
 神佛靈験の外は二変幻奇異のるを人のくは層
 るるをいふまて層とてハ朝夷地島記の凶賊
 修羅冠者矢藤五等之用心正大前くとも感服いど
 又まては感心感服さうあまてとてそのゆのまきま
 奇め奇絶何ともいふまて本軍には鈴木重忠ちかゆき
 八陣とてまきまてけて豊太因の御茶筑州ちかゆきとて若
 しめらると竹中重治が救ひ出るとは層ふくむるら合せ

好評あり
 とれまう

もらとみはせるくくは真あまてそのよの高低雲
 壊ちるハセとらうくくべもつづくまて感心と
 ○景春八陣をみてき計りてとて引くまてふ
 かれとまて者くおまてあまてとてとて自果に
 こまてうこそハダボかてがよ計りてとてあまて
 あまてのまてがまてとてとてとてとてとてとて
 うとて計りてあまてのまてとてとてとてとてとて
 かけらぬあまてとてとてとてとてとてとてとて
 こまてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 うとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

東国一個の英雄と云ふを鼻うさめしと云き又
あは為景が捕らるる時てなりうごめまつとほく
しふと見えたりあると云きと云きしうりこと一個勇
武の將雛あつたりありしと云き又又醜態を
看ししるるところとありしと云き本傳ハ里見と主とて
正しるもあらえしふいばそれハ仇と云きものハ皆邪惡と
せらぬし長尾父子新邪といふも仇と云き通
を危くせしむと云き何れもせよと云きしと云きハ敵役
やふいばそれの筆誅ハかくあつたりしと云きあり
巨田助友ハ此後そのほりやあつたりしと云きあり

やでせらるるつれぬやしんそを敵方といふ忠正の士えより
主家とて護りしものミ里見を奪ふの邪計ハふさざ筆
誅あつたりしところを長尾父子ハ此後の主謀と云きあり
扶會ハ乗じ奪んとするの意これ一個の戦国英雄
の行爲といふと正しと云きいふと云きハ本傳の本傳
しるはハ筆誅まぬれんがと云きしと云きあり○景春卒
三大寺があつたりを思はしむべき期はつと云きとありし
うちしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
までと云きしと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし
○孝副景春を防ぎと云きしと云きしと云きしと云きしと云きし

好評

これと有名のりめとうちなるまゝにぞうまは維新とてしつぬ
く例の分配精のみあつて首と取らざら又赤副と尺白
る精を於後段のつがふあり馬を分捕赤副が乗馬
此のちこれとて用あつたまゝとて首とてしつぬ
馬を分捕するありそのりめありあり代四郎其外等
といはくは赤副が乗るまゝとてしつぬ馬を分て
そあつたまゝのつがふまゝとてしつぬ又精のりめと
つがふぬ○景春がその退けたる逃げたるまゝとて
さうしつぬまゝの景澄いふて馬をうち走らせ
後ハ景春景澄とてしつぬまゝとてしつぬ於勝はまゝとて

をわひその然とてしつぬまゝとてしつぬ馬を走らせしつぬ
大将の危き場忠臣死すまゝとてしつぬ同はかくとてしつぬ
のりめとてしつぬ賢忠の善悪はまゝとてしつぬまゝとてしつぬ
のりめとてしつぬまゝとてしつぬ何とてしつぬまゝとてしつぬ
さああまゝとてしつぬのりめとてしつぬまゝとてしつぬ
あまゝとてしつぬ赤野五九郎とてしつぬまゝとてしつぬ二人
とてしつぬまゝとてしつぬ逃さるを親きほのりめとてしつぬ
みまゝとてしつぬ赤野とてしつぬ追ひつぬ後ハ奇事
たれつとてしつぬ誰かまゝとてしつぬ例不づとてしつぬ
奇めとてしつぬまゝとてしつぬ景春はまゝとてしつぬ逃さるまゝとてしつぬ

此二人親善とほいさしむべし敵はあつたやうなものと景澄
かよせむとて景春はつらうなうらなうとていさむべしあり
しむるも名あふむ敵いへのあつていさむべしとていさむべし
とてよ其敵のよづとていさむべしとていさむべしとて
おのいさむべしとていさむべしとていさむべしとていさむ
しむるもあつていさむべしとていさむべしとていさむべし
遠くおひつるはあつていさむべしとていさむべしとていさむ
かへく其いさむべしとていさむべしとていさむべしとていさむ
とていさむべしとていさむべしとていさむべしとていさむ
このおひつるはあつていさむべしとていさむべしとていさむ

がらう二つよこらうて信乃現ハ等の顯定よの然前輯のつづ
まのころの春がまきくぬこお輯回山の注進よは敗
いまいさむべしとていさむべしとていさむべしとていさむ
そのころの春がまきくぬこお輯回山の注進よは敗
おのころの春がまきくぬこお輯回山の注進よは敗
うらままで雄雄とていさむべしとていさむべしとていさむ
ひくまきくぬこお輯回山の注進よは敗
ぶるむつりくまきくぬこお輯回山の注進よは敗
そのむつりくまきくぬこお輯回山の注進よは敗
まきくぬこお輯回山の注進よは敗

とおもはるゝやぶのまゝらして先火繩をれの吹らしてそ
ろつと後のま外の一とあててそとけんそいよくま外
のウの奇^きあ^あさうちかーひらーまゝらうかづつて他軍
よあよびるまことよ奇めを絶してまきまらうこの火
猪^しよやぶれらまそハ又こあうら火をてせんそかのお
をまねきろまび大敗よあよびう彼^た反^た討^たの奇^きめ
案^あ信^んのろまび火猪^しをて敵^たをやぶるこいひつた
衆^{しゆ}又八百八人をころすと度^たく及びて有^あり糸^{いと}妙^{たう}さておも
いひくさる^られの火繩^しの先^まを^ま外^が此^この^の奇^きと^とち^ちら^らよ^よめ
の^し猪^しと^と再^たか^かと^とハ^ハ意^い外^がの^の又^{また}ま^ま外^が一^{ひと}は^は猪^しを^を緝^しの^の昏^これ

ぶあかーこぎりこいあうざんぐいづん何とらむとさう
あんとよまてハおもひもあふれど再^た出^し再^た奇^きかんと
まかろまめめもいづまきま案^あしをまか^か地^ちを^を猪^し
かーこまてらまを^を飛^たま^まけ^け投^なお^おが^がん^ん其^{その}猛^{まう}勢^{せい}と
昏^こる^るの^のこまて走^はる^るま^まゆ^ゆき^きが^があ^あれ^れど^どその
る^ると昏^これ^れて^て後^の信^んが^がは^はま^まの^のこ^こら^らう^うよ^よま^ま
る^るの^の深^{ふか}ぬ^ぬ誰^{たれ}も^も昏^これ^れん^ん衆^{しゆ}を^をめ^めと^とこ^こま^ま早^{はや}く
いてる^るけ^けら^られ^れど^ど又^{また}あ^あら^らハ^ハ大^{だい}猪^しの^の大^{だい}奇^きを^をこ^こま^まい^いさ^さで
ハあ^あら^らが^がぬ^ぬび^びら^らま^まを^をこ^こま^まて^てい^いえ^えと^とお^おつ^つら^らい^いづ^づん
下^{した}知^ちと^とけ^けち^ちま^まら^らる^る三^{さん}面^{めん}一^{いつ}福^{ふく}筆^{ふで}拍^{はく}子^しの^のお^おも^もら^らま^まよ

獸蛇即汝ハ龍頭蛇尾の一笑も又わらふ一かるけえ
しき大我と名目の中よりわらふるは老煉妙筆あつ
てハあるべし○**實**房が逃ふところより覺悟のけあが
ハ朝良が小文吾はむらんやとやうと曰くさんが
撞つたふくあつたやうといさふの賞言もふく
驕奢悻驕と名目するところの長尾曰く筆誅の
邪とゆるさぬさうさうに取ハ生捕する敵と人
は令してあつたやうに二なるものを曰くして曰く
くさるはらふまでとさふれどおぬ○**大**猪成氏をひ
まけつといふ意外の大奇成氏が必死の采配

かの在村よ弄せぬ一愚ハ愚ぢぶらまでハ志うさう
は家柄又さうその分量をさぬはさうと名くさうさ
くさうとあつたさうその秋のよわくを曰くさうさ
る妙文中よあつたさうその将その徒士の分量さう
さうあるさう成氏猪よひまけつさうさうさうさ
かの家柄めくさう神異といふことよさう深さ妙さ
さうその家柄を名目してさうさうさう深さ妙さ
さうさうさう成氏あるを思ふの士しふもせよ組伏
せて生捕よせんといふかの分身の諸小將ハを生
捕が園目の深さ分身あるは自胤さう思ふの士が

かまてわしあしぞ自業自の運堂はかつめられ
 一せぬくらすてや成氏狂きあぐ一用かさべて深し
 ○在村が邪悪不忠をいころて盛貫やう四言結まこ
 とよ愉こ快し帆大夫が行徳せんさく私よあまのぶ信
 乃が仇狂ことよ八房八が當の敵よいひつべーるめめ
 旧怨をよこへくこよ又愉使のるあけいやく帆まが
 在村が御賢慮よ回さくて狂よいひり知まよあよ
 るれよを従来こむつていひるべも助けらんは
 知れいよもつてく罰着よのぐべあしめいあは
 明白く○あよ狂令小文書が旧恩の箭ありんか

信乃が旧怨の箭射してわらもわらう一さるまも信乃が
 今ころよてお二怨を一時よくさるる例のお世め奇妙奇
 絶ハさしうもつてお怨も決まよいあぶらとてらうあく
 むくおあめるもくさほご又ころよこひままごめるよ
 もあつごんは怒りともをうれどもおむさびすてハわのこ
 であるよこまおぬお世のおむさびすもぬと精
 細やう系血つきの纒のこみのハ字すこよさえあうそ
 ぬよおおの天さまごいごありしやたうこいあひく
 ぞくゆいあうお怨も狂むらんはうのて腹稿よまため
 こそしらんさるこいんや八房八の最期よの誓言とこ

さうらゝのあぶらやうをかくりひり人の夏虫
の氷をさうさうしてうごむもくもくよ近うん在村
死流ちとぞ狩馬上は走ぬへいあつら首うへご
ゆしてはさぬを農民等よさられてるやつが死死恥恥い
よいよ細あり精あうこそ枝葉よおよめ根本を
在村走るをのぞくと陰うらうと追ぬへが底をさぎ
ゆのつる露合ひぬまが二敵と追ふのこころひ今在
村と進ぶ信乃よひひの河まがさかへつひるひまひ
のそらよあつたぬのお世のユルよあんと造化小児た
てとよいよあつじ深き奇めいしよみけをぬれだ

旧怨より旧恩をひきよぶげあつた海こみさうあつた
ぬぬ巧自在筆風んく感服さう○穴へぞつら
意外とさう誰とみふあつたを拵拵るぞ信乃
其一騎のぬきぬしゆとさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうと馳よせ景澄を罵りさうめてさ
ぬとさうのさうさうさう其の人其のぬ其のまほひさ
て紙上よあつて見さうめ信乃両敵とさうさうさう
死活とさうあつた坑坑よのぞみてさうと西三声陰をさう
さうさうさうさう至極の使さうさうさうさうさうの
奇め便便白白気気承承よて馬上さうさうのせりかへ又意外と

ろく誰もみふよふことぞいまいまのそと又美しよとて
してあまきつづべー女土抗趙雲と奇めは昏くらぬ
くるあまらうらひよとよよよよとて

百六十九回

○信乃が親き番と折れとて先回ひさて去つふ事ぞ
言に全誠あつたるにきつとやうしお評又何をいふ事
いひ一とて女の西舞をいさふがしとわひ一とて時を
かちあつくづりその下はハたむさびとていふ事
うとおぼくふれ如くちがひなりしとてや結局まの
此合戦に親き番ハ京よりうてまされとてかきとてあはれ

同は合ふまあるんといふ事ぞあまきつづまどといふ事
まやするとよ一とての合戦あつてあ言をましくおびえ
いされるあく作あうしめあつたおきよとて今朝
一とてり本もいふ事青海はといふ事義通の元将を
たまけ長尾を破りし者前守がうたごのあ用の目録
をのこいひて終するハあこまそと松蔭もいふ事あふ
信乃が其言をその義通の出陣をうたごあて知らるが
今らのとげ一とて軍中さもあまきつづまどといふ事
まもあぬやうなれどあ所の語次のとら合をいひくづ
あつて眼とあつて其精感ん現ハ等あつて信乃が

是を以て精
海伴見巧者
なるかか

従兵とていふは其の御徳よなごは
しめ給ふ命にあらうし我々が信乃が
信乃の信乃のこゝと又そ人千言を今
目のあよふやまご
我々が信乃が在村帆を又と射るこ
よろこびに
言とあつてのよこし人さのいふ
よくえんがほとよぶが若者おの
よこいひらんか
ことらうむおそれ
てあれごま
そく昔よま
へん

ありうし ○ 信乃が誓言報恩の
奇絶いふまふ
傍の癖とて其感といふ
心地のや
は危よか
のあかめ
吾が津衛
ハクあ
そくい
あぶか

あつらひたふばや一他作あるは其のきびの者なきを
ていつくまきよあつてあれが著翁としていさざよき
一人うらふきめくちろ人いれし目とつし喜ととも
りつこそねだるあんとおやつりちもらん著翁とて
たゞ其場のみやりのみと昏るまきうをちねびハニと
たやく二十年あかのとらよほつめづの版行のさだめ
者らんほびいさざよきあれども編上二小送化るハ
千支系化しねきと昏るまきうとていつく書海中
の一危と昏とつり信乃がむきびの二危にいふとつり
かきまの何やハ昏るね業あんとやといふとつり

うらふしあふぶさそくよあやぶともおむひ居つしよ
趙雲奪胎換骨のハ大意外の大奇ぬまことよ感服
かんふくし信乃よあつてハ想言言まらつてねき居りしてハ
危にちらん危ねぶかめつて時の危とハ事大ニ
異していさざよ二危かきむらのさうげな一神助
二雲玉もあつハ昏とさるれば又かのいつくともさつて
るのそくしとおおつてさうらよいあつあやむいあつ
さてあつてび二十年あつたは外ハ外ハ二危もあつとも
たふバ信乃がむきびの危かかくとあつたがハ二重よ
さだめさつしつりんとするぬんうよたづめさつあつ

さうしていつまでもぬれ作界こもるはさる大事
もあつたれど其妙よかといふ大いふふり感心
現ハが六角の大刀はぶよふおし子便のさるが
こもあつたれど大いふ用縁あつたあんとはらあ
らうとれぶよふおし子便のさるが
おひいこもよきあつたこも義成のあつた
らうとれぶよふおし子便のさるが
かここのおし子便のさるが
たうとれぶよふおし子便のさるが
さうまぶつおし子便のさるが

たれてさるおし子便のさるが
さうとれぶよふおし子便のさるが
おまが六角の他郷といふゆゑど同くを信のあ
さうとれぶよふおし子便のさるが又其餘もこも
お家の腰のさるがさるが御縁の
さうとれぶよふおし子便のさるが
おまが六角の他郷といふゆゑど同くを信のあ
さうとれぶよふおし子便のさるが又其餘もこも
お家の腰のさるがさるが御縁の
さうとれぶよふおし子便のさるが
おまが六角の他郷といふゆゑど同くを信のあ
さうとれぶよふおし子便のさるが又其餘もこも
お家の腰のさるがさるが御縁の
さうとれぶよふおし子便のさるが
おまが六角の他郷といふゆゑど同くを信のあ
さうとれぶよふおし子便のさるが又其餘もこも
お家の腰のさるがさるが御縁の
さうとれぶよふおし子便のさるが

そのちりの精
洋例のちり
をりうこれ洋
海の内風吹
る山神史の洋
内これにま
か

るのちりなるめが...
感心し...
便...
の...
た...
わり...
ふ...
と...
ま...

さ...
く...
た...
ろ...
場...
う...
し...
お...
い...
百...
○...
村長

せりとぬし里の仁政よつてまが其軍をたすけさる
らまてかこのめきさかくあふ谷の馬も人との雪懐のた
かひあるまらせつべし二郷は藩のたてあはるば
して唇をさるあつとそ一の凸凹あしひる凱陣の
後の議とせよるそのつぐよあつていふあなく妙なる
たこの感にけいんぶらよ女村長等よえさのたれ
こそおきき信のさかぬつとて穴の深きとあれ
親き信がさるとそのたれあひるやうをれさうこそ
ありのあふあぬあよいらぬ神助のきぬいよくはく
信乃がまよあつてまてやめ給正給つていひぬる

ごと凱陣の後とて又唇をさるいひぬるよ何の自
よあませぬとてよ女村長等がすまらうとる令せの
ごとその軍をたさるよてまが仁政のトおもき二思
信乃旧怨をくして射るといふと首はさるべし
をわぬとらまぬとよつとるまはさるよ三思
よてハ農民よ首をさるよの結果もぬぬぬある
うよ女村長等がまらうとて女村長の後よあは
つとよつと又あつて女村長の順次よあ
らぶとあつていひぬるよ女村長の後よあは
まてまらぬめくあつていひぬるよあつていひぬる

しるぬ文彦筆今さうよいつふべきよあつてぬが
ぬし雲雲雲とさうと嚴ハ其穴への便つぎと
此法今さうよあつてぬが何う何までつくつ
つぎよ○穴埋のぬ論を信乃現四三十一等つて直え逸
友よほら皆感佩そ此信のハ教書あつてふと稿
よあやまれらるる或ハ筆工のあやまら先よこつてん
て誤筆誤刀とやうさうさうつて今さうつてん
るま筆ついでよさうよさうて中○ぬハおきよ敵
躬方の亡ふ嚴を便ひ冨の寺院へつてひきよとつよ小文
がやうとつて今さうさうかくとつて賢將良士の本

見巧者外
つてかへ

色たなりそハ此書がさうとぬハ又格別よて例の此書が名
よあつて仁字雲玉の仁むらとさうよて義成の仁人そと
合名そ一大奇仁こ意外の奇にぬこあつてひささ
よて此大合致が大合致のめとぬ方さうゆらるる園目
さハ大合致とむさびとあつて思を罰なつてめとさう
あつて思を懲つてめとむさびが本傳さうの真面目
ふ頭よむらうまさるのさうと自由自在ぬ事前
よ評さる件よあつてさうあつてさうさうさう
かさうの大致敗い北方よ忠義の士のさめためよト死さうと
ハあつてさうハ其美名不朽いとさうと猶生らるる如

一とらふべきまゝに時を待たせしむるの真面目の事ならず
あつておぼろげにせしむるの仁まゝに玉を於神傳の仁
があらせて一と大奇仁をせしむるまゝに自由自在
の筆に俗難俗難究究んをせしめて信のよき事
るを論定論定せしめしむるまゝに一とらふ人
本傳の真面目をせしめしむるまゝに一とらふ人
傳傳ふまゝにせしむるまゝに又洲寄の火は後しむるまゝ
は多うぶくそ外外も敵方うくぬる兵兵率率い
もあふくそ外外もいふとせしむるまゝに大體大體をいふ
前前評評よひしむる如くせしむるまゝに今と出さ義成が數百

評しゆて
妙ちのひな

舟を焼つくとも八百八人の峻峻策策とてふひしう仁仁
殺殺しぬともいふと死あやむとのみして勝とあり
そふるのあふくやあふく殺殺とせしむるまゝに
暴暴仁仁のいふとあふく死亡ハ勝敗の自れ自れ
義成の仁仁はあふく一主とせしむるまゝに
双方をさす一團圓一團圓はあふく仁軍の仁軍仁軍
とせしむるまゝに義成がいふとあふく三つ
そと討死をせしむるまゝに仁軍の意をせんやい
そとありて神業神業はつくもあふく義生義生も神神
何り遠く洲寄行徳洲寄行徳せしむるまゝに

もかして早馬早船と云ふは、
我の討死と云ふは、
中へきうん行徳のよのまがらうづまぬる自れらの
海等の神業よ遠まゝ自れらの
ても余ねつまゝに蘇生せざり
ざるも余ねつまゝに蘇生せざり
也し大奇仁と云ふは、
皆蘇生と云ふは、
吾が悔言と云ふは、
て又そのむまびのあつち
て又そのむまびのあつち

まゝと云ふは、大水陸衆鬼と度
自れの死に於て仁意のあま
おひえと云ふは、
吾も吾もつくさるるや
よと云ふは、
たれと云ふは、
まゝと云ふは、
くしと云ふは、
諸と云ふは、
ちぬると云ふは、

まことよめに威を敬服○現ハが日暮とありて
議しよむるにその時その時のわがうよる
つゆとまゝあつていふべき事なりと
これハききわむ人々をある陣せん和敵ハかふ所
こよゆらまてこそとあつてありや
る一現ハが議して信乃とて
ることをして
よれももろもろもろん
とあひえうして全勝の書面を
於あとをつんといづく
の役割をいふ

細評精妙

とて其あれもゆらまあつて
敵兵のあが降参とあふも
士等ハそもさびら
こよ名のあつれえ
よとあつて
かそ放ち
はらひ
となつて
まよ
くもあ

祝ハガ推恩といふを分とすおとや、いとありぬが奇
ちらふ此約束ありふと外甲冑あり洗すべ
て洗流しける奇ハちやんと祝ハよつとあてさる例の
五ふしとさきなきうふ於此屍體あり川とさるのぼりし
し又奇なる射るあり人海に流るを救ふと述く
流しける祝ハガ分とすよく救うる奇ハ奇生しけるも
奇ぢれどもそれハもとろ神丹靈妙行りしと神丹あり
るこそよき奇ハ奇生しあり但し奇奇等神
丹ありとぞとありしと神助ありてありたるハその
文面よこそありたるといふとありつるよとありつる

今此朝寧ハ神助ありまるとありぬとありぬの
奇ありて懸生しける神丹靈妙のこありぬとありぬ
靈藉の奇といづく義通初陣の花うり死ととくふの
仁いづく定正を服せしもの一つとされバ神助朝寧が
たのよ奇ありとありぬ義通のためよ奇ありとありぬ
るありぬとありぬ○祝ハ此屍體よありてありぬ
海崎の勝利をむむ於朝寧が仁とありぬとありぬ
して其奇ありとありぬ全勝を告とありぬとありぬ
こそよ奇ありとありぬ例のめとありぬとありぬ
て神丹とありぬとありぬ大医とありぬとありぬ

詳しむて程妙

奇事の詳れハ
奇言ハ奇事ハ
とも思入候浮

○信乃が靈猪といふことありて、かく其猪の奇を
及ぶるや、よみ入てその奇又その神助ある事を
知りある文面よそのよしとて、おはる昏るるを
て、その車を焼く時、らくちやくをまひらちるんを
焼^やきより再おせし、又らくちやくを其後直え
送なが言よて車と焼く時、むるそくかまけを
つゝとありしとおめていひ其猪の又あやしくめて身
方とちまけよとつづき、又其時、らくちやくをい
現ハミ祝^いひ信乃のあつばよ入り、おまひ感嘆^{かんたん}よま
そこよ其奇といひ其神助をおまひ、おまひの言よ

辰相よきて、つげの中よそのふぎとつづき、箇條^{くわじょう}
の中あはつづきよとつづき、ぬいもちんころよ、
目^めよ又かまけをかくうせし、海をいひちめて、
奇の神助よとつづき、よさる深ゆの筆^{ふで}けり、
信乃がおをいふよ義通が其猪よ又一層^{いっそう}の奇、
告^つぎやよ辰相其奇とつづき、説くおまひ、
義通自分よとつづき、辰相がとつづき、
お場のあつまよ、よハ義通よ何の言よ、
猪よ又一層^{いっそう}と説^{せつ}あつまよ、そのよ、
いふこととつづき、誰^{たれ}りやとつづき、今^{いま}かく昏^{くら}る

在て能者せざるべ
んらるゝ小徳あり
あてめつと有徳
と此典せしむる
あゆむる事
んや思ふ事
とあり

るしてとまして置きしあんなりてい乃ぞぬるも
吾々壞ごころ佛家よりやう二千三天とつめさるる
上と大なるの座のその座とのちがひハ道ありおちるふ
從かふるかたんと此軍ハ此信乃取ハが成氏あり莊介
小文吾が津衛あり孝嗣が定正ありとるをむもいふ
妙手凡作のやうなるはむもいふをくはるるいよさ外
のぬれさうとハ自由自と筆くふさて此天猶信乃
取ハがためのさうハ標月の表叔母は茶が佐子の初陣ハ死
あつさるのさうぬそのぬももらんぬぢやうふ諸もあひ
勝といてさういふあつ討つるあり義通のハ強敵景春と

甲陣方
はれより假を
しそ真と假を
中よりあり

面が然ハあれどさういふと討つるをなくさつて危然ハ及び
ころ但ハ危然ハ及びころハ取るる孝嗣がためころ義通
ハ暢教よあともぬ弓勢のためハ勝軍ありハ其の諸
勇士ハ柄ハあつて大なるとハあるさうと危然ハ
ハこそ義通ハとあつてころ取つてころ取つてころ取つて
とあつてころ取つてころ取つてころ取つてころ取つて
義通ハハあつてころ取つてころ取つてころ取つてころ取つて
の士を射つて討つるころ取つてころ取つてころ取つてころ取つて
義通ハハあつてころ取つてころ取つてころ取つてころ取つて
場ハおちるのハ柄場ハ俱教ハあつてころ取つてころ取つて

その取捨あり義通の惣務いづぐづびの辰相がいま
ほつて固みぬ陣せうかくてハ危我のみまてきるハ勝も
ゆるものなりカつとも諸々の勝ゆるものごとて国府の臺
一軍の終いおひばさふとも義通の勝ゆるのちり
別ハ一ものゆるものなりとも何うせんぬど内けの二もの危
我のみまて花むふハ大猪成氏の奇花あつてふとも
此の勢こそ二管領の下まぬその貴よあつてハ第一の
主なるべし成氏と我のころこハいふも花あつていお
あつてやむむのため又の信乃現ハのちあつてい
奇猪のおもてこころとせんふさへもぬぬ入こ

仔細ありき
とまのりにて

猪標目こそころをむひとあげてあぬ奇猪とて我初
陣は花あつては海氏のころのこあんなや秋車を獲き
ふさむあて火箭のそあふとけむん六十五頭とてお
陣全勝の花あつてとるハ大猪の神物するいふまでさ
六十五頭そのせとハ三よのつこのあはしど信乃がさる
ところの火半はかろふといつてハもろんハ麻利支
天河系は流しより奇しくも人ハ馴くるハ後ハ世あり
んしめ伏床神靈あつたの麻利支天と神とつらふ
たうりてふさかころかどハ九猪もとてハ神物神使
ふさふさふさよ出沒自在猪の大猪ハ麻利支の

をあらわす
らの穿敷言
例一は海なる

駕とりのぬら神犬の化現あるり又ハセと凡猪と云ふ
霊物いぬバ念して一大猪とありしるるを云ふ
神をふしむるころとつづき一とて義通凱陣の後
三とと堂科家附伏所の木主と云ふ西ぬあび野
猪をかひくる者たよの賣まその後話ありて此一條を結
かれしれど六十五頭又を云ふころとつづきその
をさすういふぬあびと羅氏の作あぶま何が傳は
妖あたのおれと云ふぬいせなるそのかぬあびとつづき
いよくぬえおやうと稱義の言あつるががふとつづき
正邪のたがひあれど此五猪と云ふころとつづき

してその神使雲をあらしる流とよらしてあへん
あふほさるて神をあらしる流とよらしてあへん
山王の猿あぶまを云ふころとつづき
あつとつづき
此のゆゑの一條よみ辨此のを火牛よみゆゑのこ外
ぬこのおれと云ふ山奥もあつる里中よみ正ままで有
しるそのゆゑの辨は云ふころとつづき
その軍の用よみはあつる辨あつるを神助のこ外
猪よみはあつる天と云ふ軍神しるのころとつづき
よみはあつる感を云ふ感の帰る

信乃親を以て議の理議するにいとをいし福村を以て議
すよあり此時義成は洲島の陣にあり福村を以て
いさういぶぐし上洛の一件は老侯の意をわきまはし
ハ龍向のまがねにありぬらもせんと老侯のさむら
ともあまを次うて龍向を先よこせきよもあはば義成
は義成のあはれもた本はくち福村をいぶが義成をよ
さよあはれん○再太郎就介が大川大田の使として大川
をさうのげうよめて勝軍を告ぐるその文中原胤久が深手
こそ危きよある候のころやうかつ奥は神舟を野生
のくむ合又信乃親ハへの合中は再就二女年のるを

のやあはれもた義成通ひまでおあつてそのい言は
まてまがねもいぶが俱教にいゆきあはれがら
陸政をいさうあはれ俱教にいゆきあはれがら
あはれあはれがらあはれ又錦江邸を洲島にま
らせるといふ朝寧がいにその勝もあはれも
いさういぶぐし上洛の一件は老侯の意をわきまはし
てのつづきのよきと合もあはれもいさういぶぐし
や安んじをいさういぶぐし上洛の一件は老侯の意をわきまはし
昔がそのい言はくちあはれが洲島への使としていさういぶぐし
いさういぶぐし上洛の一件は老侯の意をわきまはし

よあつばすんが勇切はよあぬ女年もて本陣に使を
んが六郷士しうもさる有名の盾持儀杖が小
さうづまるとうりよそ二女年かこも使して義通の
見参入ひまがあもあさうしうもさるよと又さ花あり
しうもあづまのくは役ころ精あつるよ○五十三天素
も若くぬハな武士しうもと欲まざいよるよんて
あも何まはゆるしるやうりしうもさるしうて一隊の長
よあづまづあつたに二人のあもしうに海あん又さ
のよあもさるかあもしうて目つかあもしうに黒人のあみのま
うもさるかあもしうで只さるを使ひ甲かをみぐくよ

精一ゆてり
あると照
るかへ

てあ士を欲まぬよとさうしうもさるしうてさうもさるよ
俠者の貫目ハしうもさるしうてさうり重うり次国大輔
三ハ又さあもさるしうもあぬにぬハ何とあつらんそり次
輯よとほびしうのさあまうりあづまあづま一者副と
さうもさるしう○ねハ遠な又施業めしうもさるがなるも
文面あぬしうあぬとさるしうがゆるさうあよ五十三天素が
あもしうしうあづまあづまの文段よさるしうのま
よくさるままもいあしうかー○しうもさるしうあも
しうのあもさるしうあもあもあもあもあもあもあもあも
信力あもさるしうあもしうねハしうもさるしうあもあもあも

二犬のうは何のなるべからずなきごとくさうさうは曰ふ
しんじつとあつらふ二犬のまことと曰くはあつらふ
うふあつらふま双玉と投さう一物顔と見えきぬ
又信乃三世因ある白きまうさうひあつらふてそのよと
解くるまきやくひこととほびなうふまきとあつらふて
そのまきとさうねハ何もせよ又命とさうけて捕さ
き人とさう人さうさうさうあひ解さうさうさうさ
うら其実いさうかく此と疑を旧玉はあつらふて
くてハ人まきまき二犬うてハ心よさうさうあつら
ふと理論とさうかぶらひさうさうさうさうさうは回

この後好もまの
同からぬと永辭
信乃を徵宗
帝の金庫小
さうの色を
燕青の指比小
あつらふさう
しておれさ
さうの澤を
をさうさう
本文のし
死さうの
命のあつら

よつらてのさうまきあれは方流園のむらハもさう
赤輯なるまきとさうさうさうさうさうさうさ
よつてあつらふとさうさうさうさうさうさ
いさうさうさうさうさうさうさうさうさ
さうさうさうさうさうさうさうさうさ
感服至極敬服至極○親善代四郎等又孝嗣等
をさうさうさうさうさうさうさうさうさ
道とさうさうさうさうさうさうさうさ
半丁は自注の文のあつらふ又さうさうさ
軍監とさうさうさうさうさうさ

佐右の申す
よかへうま放
多罪

べきるむらむど何づんいふもぬらういふまらふ○石後の
千葉の城をいふ良干としておしむよるこれ
こあさより犯して奪ふよあつむを狂いぞ空城よるあ
ぢごとそれがたのよわらま同じ後回孫全の山内
館を貞任が獲ちておるも同じ一其末ハモ也が
一ととていづてハ敵を懲らよたつておしよの
ととていづてハ敵を懲らよたつておしよの
らよらとていづてハ勝よのうて奪ふよ似のよるけあ
ととていづていづていづてもやうとつけおるは一面

○此今小文吾次國大舞三久とよその面今双方さ

こそ本をよ有りの此今小文吾が片貝をきりし何
とていづていづていづてもやうとつけおるは一面
よ何のうがもいひいひしは後とておれとよめ
くらし言もあらういれしく後輯のつづれめあうよ
あかづれづしを誰の言を解くるあうてたてや
くふと感服をさしするのあしやうもさゆめと今ま
るはいづれの輯あしとてみよおひかへはとてハと
今とよあ人がさしとてまことの子びをつけらぬ
たるよよ遠きまがもまがもまがもまがもまがも

○再太郎就今とわらちびは俱教二使して国府志の膳

是等の空費數
を求むるに五
林示の二あるを
許するべきは
かやうなる

親とをうと
言を盡され
生をを詞後
てんか肢せ
へ一ををう
かそのま
言を費は
あらるへ
許するに
許するに

是の空費の
あるへ
うの半
筆を
なる
あ
ある
か

るハそのまゝといふ言半句よりいふまゝ
きやうにおもはるゝに安房は主とせしめて
旧癖のまゝに○安房は主とせしめて
らに路草の軍監の解は改行は改行とせしめて
てにまづ道とせしめて改行とせしめて
洲寄の本陣は改行は改行とせしめて
らに改行とせしめて改行とせしめて
べ一ぬ真の祖母は改行は改行とせしめて
るあつちうは天と祖母とせしめて改行とせしめて
る文面のあやふい改行とせしめて改行とせしめて

昏まぎぬらぬてのまゝに改行とせしめて
かてついの言は改行とせしめて改行とせしめて
かんとおもはるゝやうな改行とせしめて改行とせしめて
さぬと拙筆は改行とせしめて改行とせしめて
がれしうが改行とせしめて改行とせしめて
まゝに解してついでに改行とせしめて改行とせしめて
房は改行とせしめて改行とせしめて改行とせしめて
て改行とせしめて改行とせしめて改行とせしめて
於文の表とせしめて改行とせしめて改行とせしめて
たら文の文とせしめて改行とせしめて改行とせしめて

狂女ぬ真がおんおまほろふくぞるのづく信のせら
 ん先らるるいふたざらふくは精筆よそのつるあつざら
 つらうまやういおまほろふくは精筆よそのつるあつざら
 目らるる間さま大戦の忙はげやうと昔約して昏せ
 たらうまよのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 具足の大士持つるのめれのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 けり此所あると精よ昏せたらうまよのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 めるる昏せたらうまよのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 ぬ真が一言のあつざらふくは精筆よそのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら

惟考てなほ中て
 ちしといひわねど
 真の伴の素
 志の如きはるる
 あり

後回らるるよ今らるるのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 らるる昏せたらうまよのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 おまほろふくは精筆よそのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 かくく昏せたらうまよのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 ぬ真が一言のあつざらふくは精筆よそのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 筆つらうまよのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 けり此所あると精よ昏せたらうまよのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 めるる昏せたらうまよのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら
 ぬ真が一言のあつざらふくは精筆よそのつるあつざらふくは精筆よそのつるあつざら

らんとおもはれてむらひ入てらんを比もさるるに好ましく
○此を末の今教は前板の像替をももひまぬ
しる又二懸くしておもゆるし

百七十二回

○五十子城中前輯のるどよりふくむい昏かとして
又二驍勇をそへらぬる然二海賊名のいふ一まのこふ
らむの海賊王寺と伯仲とあつてそのもふふま
へおもひいふもぬ我はよまき先鋒まづ一段のい
ほひそるるに於三萬よこごごあつてさうが又いふまも
こ五萬よなづ軍威せつるはたの地大あごの破る

よたえそ一狂つてもよ五萬とだいつらうて十萬餘
とあつるのほふとつていふおもく敵をまづとり
ひいぐのつて和漢ともよくおもひはれいふまも
あつたれど里のあくまで仁義軍定正の邪軍えよう
あつたれ兵がさへおつるたる雲懐のたむいふとつて
しる○憲儀緒進沐浴しては名代登山往返茶
礼懇請さうとては苦さかしく風外真ん中あやうよ
自鼻しうごうさごうて善哉しくたあましくいふ念成
しきみりてあつて仙童の顔ぞうへよかゝらうよん
んづらふが必ふまかさうておもゆるるうらまのどくう

まみより一〇五万の大兵千両の銀よのりあり
りんぎのいさほひは千餘のさめのあつたるあつて
たふれてよむいよむさむままだあめたるいよ
たるじさぬ文うふぬ筆うふ但一邪軍のたふりよ
つらつらつといふまきやいよふんふん又あつて
め衆邪たあめと魔軍とあつていづくど神軍と
しづくまきよあつていよあつていよあつていよ
りんとあつてあつていよ一與ありあつていよ
たぐまきと歸しよまよふ三浦は逸れいよく神助神
風のあつてあつていよあつていよあつていよ

らあていよくとら一〇五万の銀よのりあり
姓名いづれしとら一〇五万の銀よのりあり
いよあつていよあつていよあつていよあつていよ
威ぜらあつていよあつていよあつていよあつていよ
あつていよあつていよあつていよあつていよ
大おの定むいよあつていよあつていよあつていよ
とあつていよあつていよあつていよあつていよ
船の頭人でありあつていよあつていよあつていよ
へあつていよあつていよあつていよあつていよ

壬寅春二月

十七日拙答後

著作巻

のつづめを外の好むもちらんよとまぎぶつづぬけら
 うふ赤壁の撫骨火攻を双方にませられてぬいのつを
 焼くぬがよとせぬしう奇絶のほごいひとてよ前輯に
 拙評せり歌方ふんをいひよふのまあご歌方の
 焼草ぬふふが用とを又ぬころり晋六ごとき頭
 人ありとて其期にたび其ぬを奪ふんよも同じみ
 いづもきてみむるご狂りの馬即の牛命がわさうて頭人
 するものゆきよとて又其期は奪ふのトとけり
 あつよふに實儀がよまご別表よとて定正も智慮顔
 よそ歌の便利をあてぶの愚心又おのしもまを

